

おっぱいだより

13号

赤ちゃんの沐浴の歴史

昔のドラマでこんなシーンがありました。 妻が産気づく。夫は慌てて産婆さんに電話。到着した産婆は「早くお湯とタオルを用意しておくれ。」 妻「アナターっ！！生まれるー！！」 オギャー、オギャー。 そしてすぐに産婆さんが赤ちゃんを産湯へ。

初めての沐浴



現在は、出生直後に沐浴する施設はほとんどないかもしれません。その理由として、産まれたばかりの赤ちゃんは胎脂といって、皮膚の表面には白い脂が付着しています。この脂は赤ちゃんの体を冷やさないようにする効果があります。体に付着した羊水も同じような効果があるので洗い流さない方が赤ちゃんにはやさしいのです。ちなみに羊水は母乳と似たような匂いをしています。産まれたばかりの赤ちゃんが目を閉じていてもおっぱいを探し当てることできるのは、乳首から羊水の匂いを発しているからとも言われています。

その他沐浴をしない理由としては、赤ちゃんの皮膚についた常在菌を落とさないためです。常在菌を早期に獲得することで赤ちゃんの免疫力を高める効果もあるので、私達は出来る限り産まれた後にお母さんの皮膚と赤ちゃんの皮膚をくっつけて、お母さんの菌を赤ちゃんに与えるようにしています。さらに外の環境に出たばかりの赤ちゃんは呼吸の状態がまだ不安定です。すぐにお風呂に入れて負担をかけることで、呼吸状態が悪くなる恐れがあるからです。

産科病棟では出生後1日目と、お母さんと一緒に退院する日に沐浴しています。上の写真の赤ちゃんは人生初めての沐浴シーンです。皮膚にはまだお母さんの羊水と血液が付着しているので、スタッフは手袋をしています。体に付着した羊水はヒアルロンサンクリームのようにヌルヌルとした感触です。毎日お風呂に入れないの？と思われるかもしれませんが、母乳が出



始めるのに数日かかるため、その間に赤ちゃんの体重は産まれた時よりも1割くらい減少します。体重が最も減る時期の沐浴は赤ちゃんにとって負担になってしまうので、体重が増えるまでは少ない回数にしています。